

2026 年度東京海洋大学海洋生命科学部海洋政策文化学科 総合型選抜(専門学科・総合学科卒業生) 小論文① 問題用紙 (1/4)

2025 年 9 月 25 日

※ 解答は解答用紙の所定の欄に記入すること
問題用紙は持ち帰らないこと

受験番号	氏 名

文章 1 は、のちに歴史人口学という新しい分野を切り開いた日本史研究者が、自叙伝の中で大学 (X 大学) の経済学部を卒業する前年度について書いたものである。これを読み、問 1～問 3 に答えなさい。

文章 1

1949 年に、経済学部の産業別経済史では、羽原又吉先生 (1882～1969) の漁業史が開講されていた。先生は、長く水産講習所 (東京水産大学を経て現在は東京海洋大学) で教え定年退職された後、X 大学で教鞭をとられていたが、多くの論文を学術雑誌『社会経済史学』に寄稿されていたから、お名前は知っていた。4 月になり、その講義が開かれる教室に行くと、聴講者はチラホラ 10 名前後に過ぎなかったが、先生は悠々と懐中時計を出して机に立てられ、関東漁業の成立が関西の漁民によってなされたことから始められた。

私にとっては、講義の初日から新しい知見を得た思いであった。紀伊半島東岸にあり、私の本籍地ともなっている紀州熊野にある母親の郷里を思い出さざるを得なかった。

「そして九十九里浜の地引網で収穫された鰯が干され、砕かれて、俵詰めとなり、干鰯問屋の手を経て大阪市場に送られ、関西の棉作、菜種作に肥料として用いられたのです」と結ばれ、私は、江戸時代に始まる全国的市場経済の具体的な一例を教えられたことを知った。きちんと学校に行っていれば、こういうことは何かで間接的に知っていたのかもしれないが、出席しなかった報いで、その時になってようやく得た知識だった。その他、漁業史は全く新しい分野なので、学ぶところが実に多かった。

その羽原先生が、夏休み前の最後の時間に「これはすべての人に課すわけではないが」と断られた上で、1 つの提出任意の宿題を出された。それは「もし夏休みで地方に帰られる人がいたら、どの時代についても構わないので、その地の漁業や漁民に関する古い資料を調査して報告して下さい」というものだった。

(中略)

そのように、羽原先生の講義は一方的な知識の伝授ではなかった。ところが、学年末の試験になって、羽原先生は驚愕される。というのは、受験者が 500 人以上もいて、先生は 500 枚以上の答案用紙を採点されることになったのである。学生の間では、先生の講義はいわゆる「楽勝科目」で、1 回も出席しなくても、学生の間で写し回されている講義ノートにしたがって、その一部を答案用紙に写し取れば及第 (恐らく A か B) の評価を得ることができた。

私は先生に呼び出され「君、こういうことなんだけど、どうしてだろう？」と問われ、答えるのに苦慮した。と同時にこの上なく恥ずかしかった。つい先年、私も講義に出ずに試験を受けた経験があるから同罪といえなくもない。しかし私は他の科目ではあったが、自分の勉強の結果を答案用紙に書き、その評価は講義をされた先生の判断にお任せしますという一句を結びに記している。この点、(ア) たわけではない。

尊敬する羽原先生に X 大学経済学部の学生の行動を理解していただくのに汗だくになった。ご高齢の先生は、不思議そうな顔で私の説明を聞いていらしたが、1950 年には X 大学から経済学博士を授与され (中略) 先生の漁業経済史上の業績が高く評価された時期だったので、彼自身は全くショックではなかったのだと思う。

そういうわけで、1949 年の夏休みに三重県引本へ行った。母親の実家を根拠地に付近の漁村に行き、江戸時

2026 年度東京海洋大学海洋生命科学部海洋政策文化学科
総合型選抜(専門学科・総合学科卒業生) 小論文① 問題用紙 (2/4)

2025 年 9 月 25 日

※ 解答は解答用紙の所定の欄に記入すること
問題用紙は持ち帰らないこと

受験番号	氏 名

代の史料の所存を尋ねる試みである。その結果、引本には歴史史料は残されていないことがわかった。恐らく、しばしばこの地を襲った津波に流されてしまったのであろう。しかし、近くの須賀利という村には史料があると聞いた。そこへは引本から毎日何便かの巡航船が出ている、焼玉エンジン^(注1) 独特のポンポンという燃料のはじける音を出しながら、引本の港から一度外洋に出て岬を廻り、その奥にひっそりとたたずむ須賀利の集落があった。

村役場を尋ねると、村長は、一学生に過ぎない私を大変手厚くもてなされ、自ら役場横の階段を登り、かなり高くまで行ったところにある村有の蔵に案内された。中に入り、古い大きな長持ち^(注2) の蓋を鍵を使って開け、私に「どうぞ、ご覧下さい」と言われた。古文書とは初対面だったので、いきなり長持ちいっぱいの文書や帳面を前にし、何をどうすればよいのか目が眩んだ。

一番上に「牟婁郡尾鷲^(注3)内須賀利村御検地帳」と題する冊子体の文書があり、何年のものかを見ると、驚くなかれ「慶長六年一〇月吉日」とあるではないか。慶長 5 年は関ヶ原の戦いの年で、西暦 1600 年と覚えやすい年代に当たり、慶長六年は 1601 年、つまり 17 世紀の最初の年である。(中略) 私の卒業論文は、同じ頃の英国重商主義^(注3) についてだったから、「日本ではその頃の古文書がこんなに簡単に見つかるのか」と思った。実際には、後日、須賀利村の検地帳原本は、何らかの理由で行方不明となってしまう、私の見た検地帳は、1698 年の写本であることがわかるのであるが、何か初球でホームランを打ったような気がした。

他の史料は、①地下網^(注4) といって、村民一同、一家に 1 人は参加する「村張りの網」ともいう大型の網漁業、②八歳になった者の名前や、死亡した者の名前、年齢、死因、他村との流出入、など細部にわたる人口の状態や移動が記録されている貴重な人口統計文書などがあり、辛うじて内容も読めた。だが解読できなかった文書も多数あり、近世の村落文書原本を利用して研究するためには、古文書解読能力の習得が必要であることを身をもって知った。

9 月になり、羽原先生の講義が始まり、私は須賀利村の史料のことを紙に書いて提出した。先生は「こういった漁村史料の調査を実施しているところがあるから、ぜひそこへ行って報告しなさい」と月島^(注4) にある日本常民文化研究所^(注5) を紹介された。あの宿題には、そのような背景があったのだ。(中略)

対応してくれたのは、たぶん事務長だったと思う。一通り話を聞いてもらったあと、私に「ここへアルバイトに来ませんか」と言われた。いきなりだったのでちょっと考えたが、卒業論文との兼ね合いもあり、翌年 1 月になったら、週 3 日という条件で日本常民文化研究所にもぐりこむことになった。ここで古文書の読み方を習うこともできるだろうと思ったのである。②羽原先生の一言がこのような結果を生み、私の人生を方向付けるとは全く考えもしなかった。

(中略)

私が常民文化研究所に在職したのは、大学を卒業した 1950 年 10 月から、1953 年の 3 月までの 2 年半である。決して長かったわけではないけれども、振り返ると実に大きな経験であった。もっとも、学生の頃から、いわゆるアルバイトで通ってはいたし、(中略) その後も永らく交流が続いたためだろうか、あの 2 年半は、実際の何倍にも感ずるのである。

2026 年度東京海洋大学海洋生命科学部海洋政策文化学科
総合型選抜(専門学科・総合学科卒業生) 小論文① 問題用紙 (3/4)

2025 年 9 月 25 日

※ 解答は解答用紙の所定の欄に記入すること
問題用紙は持ち帰らないこと

受験番号	氏 名

(速水融『歴史人口学事始め 一記録と記憶の九〇年』筑摩書房、2020 年、より作成)

(注 1) 20 世紀前半の日本で小型船に多く採用されていたエンジン。

(注 2) 衣類や書類などを収納する木製で直方体の箱。

(注 3) 産業を国の保護により貿易で有利にして国富を増大させようという考え方。

(注 4) 東京都中央区にある地名。

(注 5) 実業家で 1940 年代には日銀総裁や大蔵大臣も務めた渋沢敬三が 1921 年に創設した民俗学を中心とした研究所。文章 1 の当時は、水産庁に委託され水産業に関する資料の調査を行っていた。

2026 年度東京海洋大学海洋生命科学部海洋政策文化学科
総合型選抜(専門学科・総合学科卒業生) 小論文① 問題用紙 (4/4)

2025 年 9 月 25 日

※ 解答は解答用紙の所定の欄に記入すること
問題用紙は持ち帰らないこと

受験番号	氏 名

問 1 (ア) の中に入る最も適当な言葉を文章 1 の中から 20 字～40 字で抜き出さない。

(20 点)

問 2 下線部①について、羽原先生が不思議に思った理由として様々なことが想定される。その理由を文章 1 の内容から考え、20 字～100 字で説明しなさい。

(20 点)

問 3 下線部②について、つぎの (1) および (2) に答えなさい。

(1) 「羽原先生」の一言は著者の人生にどのような方向付けを行なったのか。40 字～100 字で説明しなさい。

(20 点)

(2) 羽原先生の一言は著者の人生を方向付けたことの 1 つとなったが、あなたのこれまでの人生の中で、「方向付け」となったことにはどのようなものがあったか。「方向付け」の結果として起きたことも含め、200 字～400 字で具体的に説明しなさい。なお「方向付け」となったことは、文章 1 の著者のように人からの言葉や出会いだけでなく、これまでの学習、山・海・川・生物といった自然、自身が体験した出来事など、何でも良い。

(40 点)